太棹

東京　太棹社　発行

謹賀新年

名物 御守最中

うろこ餅

みのり

高級あられ五種の詰合
御進物用……金壹圓より

煉羊羹

★★★★ 趣味の名菓 ★★★★

名なし草

花の名にちなめる小形菓子
三十餘種を取あはせたる純
江戸趣味の御菓子
御進物用かん入
風流壺入
はかり賣 金八拾錢より

日本橋水天宮前

三原堂本店

電話芽場町二六六六番

謹賀新年

太棹社

主幹 富取芳河士

平野紫雲
富取三久子

寫眞部 河崎秋嶺

桑港支部 杉山陶岳

（客員）

（イロハ順）

田田薄小安齋三平
村中田泉藤藤宅山
西煙斬蛙鶴孤拳蘆
男亭雲鳴夫三軒江

神馬里芳女史の愛孫

神馬里芳女史には眼に入れても痛くないといふ愛孫が三人あります。

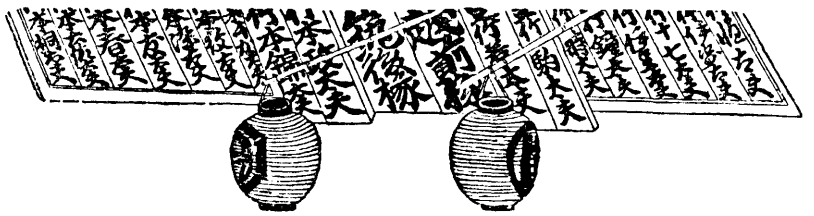
父君は先年早逝されまして、今は懐かしき忘れかたみとして、母君の手に厚く育てられてゐらつしやいます。

寫眞は富美子未亡人と長女禧子様です。

浮谷祖樂氏愛孫
昊代様の舞踊

浮谷祖樂氏の愛孫昊代様は、今年七歳におなりですが、舞踊がとてもお好きで、四つの時にお染を踊つて、あどけない中にもその天分を發揮して驚嘆させたものです。

この寫眞は五歳の十一月、師匠坂東古登清さんのおさらひの時の『汐汲み』であります。



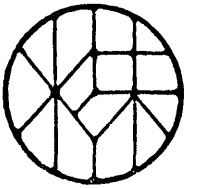
（昭和十二年一月十五日）　太　棹　（毎月一回廿五日發行）

◇◇◇第八拾貳號◇◇◇

◇寫眞＝神馬里芳女史の愛孫●昭和十一年度の榮冠に輝く人々●浮谷祖樂氏の愛孫

◇丑年にちなみて……芳河士…（一）
◇新しい藝●古い藝……安藤鶴夫…（二）
◇道樂根性……平山蘆江…（五）
◇今はむかし……久保田金僊…（七）
◇義太夫に節がなければ……坂本猿冠者…（九）
◇義太夫のゆとり……北仙…（九）
◇俳諧伊賀越道中双六……杉山田庭…（一〇）
◇天狗會……三宅孤軒…（一二）
◇再び素義界へ進出に就て……三ッ木美登利…（一三）
◇義太夫お勸めいろは譯……森三好…（一四）
◇太棹社彙報……（一六）
◇十一年度の義太夫界……（二六）
◇大阪版……（二八）
◇各師各會新春初會……（三一）
◇當座帖……（三二）
◇各地通信……鈴木錦祥●愛好生…（三三）
◇編輯後記……芳河士…（三三）

謹賀新年



兜會

事務所

日本橋區兜町一丁目四番地

鈴木甚四郎方

電話茅場町〔二五六五番
二五六六番〕

謹賀新年

巴津天會

會長 寶藏寺天昇

顧問 竹本巴津昇

相談役 宮島和紅

常務理事 武藤壽昇

事務長 長谷川勇昇

事務所

杉並區和田本町九五一

竹本巴津昇方

電話中野五七九三番

謹賀新年

無名會

浄曲

中澤巴
竹内たもつ
鈴木和樂
松田わか葉
河野國聲
桑原美峰

（イロハ順）

謹賀新年

聲友會

（俳號イロハ順）

竹内とをる
林　和勢
中野吳羽
松岡語松
金田金鳳
鎗田みやこ

義松會

及川旭
疋田大龍
井上巽
村田玉寶
三口松藤
田中司若
豊澤松造
豊澤松四郎

謹賀新年

五聲會

事務所
京橋區銀座西六丁目五番地
井上聲鳳方
電話銀座一七六〇番

都連

國井やまと
藤田其晶
小川都山
小川都浪
安藤都昇
竹本都太夫

謹賀新年

芳聲會

豐澤芳太郎

榮井清辰里千一

（亂表）

筒芳壽芳壺重

朝見會

竹本朝見太夫

平井壽樂　松井松香　松岡波朝　白井井孝　野中一竹

謹賀

大東京

（入會順）

岐阜縣高山町忍町
嬉會創立者
巴昇　鶴巣彌平

牛込區東五軒五四
かなめ　飛石久太郎

江戸川區小岩町八ノ一、二八五
和光　河合章光

深川區門前仲町二ノ七
文鏡　土屋銀太郎

深川區門前仲町二ノ三
花昇　北脇源藏

深川區門前仲町二ノ三
蝶子　北脇てふ子

足立區千住仲町一〇七
柳　梁川幸吉

足立區千住橋戸町五九
時昇　三浦銀藏

足立區千住四丁目七
清勝　勝間清子

足立區千住柳原町一八五
山登　山本隆藏

本郷區湯島兩門町一四常陸樓內
單語　渡邊武雄

神田區須田町一ノ一八
清柳　外川政治

深川區永代二ノ七
喜代子　小島喜代子

大森區新井宿六ノ六二七
波朝　松岡なみ

牛込區東五軒町四四
三好　森積五郎

荒川區南千住町六ノ一七五
一九　加賀山大輔

淺草區馬道一ノ七ノ五
專好　波田よし

板橋區板橋町十ノ三、一八〇
三朗　中澤三郎

中野區橋場町五七
さとる　石川智

杉並區高圓寺一ノ五〇三
園樂　園田佐太郎

杉並區高圓寺三ノ二五〇
東　米山惠造

芝區田村町二ノ三ノ五
淺香　淺井才二

杉並區堀の內一ノ二〇五
喜昇　小川喜七

新年嬉會

日本橋區江戸橋一ノ一五　文糸　村上豊治
荒川區尾久町四ノ一八七一　一郎　木村花枝
品川區大井水神町二〇五九　其芳　鈴木建司
神田區三崎町二ノ八ノ五　淺路影山福太郎
王子區下十條町五一七　もみち　宮島房治郎
横濱市鶴見區潮田町二〇五〇　大和　青木米松
大森區市野倉町八八　糸樂　山本良太郎
目黒區下目黒四丁目九八五（大石方）　旭六　金子朝三郎
下谷區新坂本町一〇一　歌調　石村知夫
淺草區藏前一ノ五　光玉　湯淺光榮
淺草區猿若町二ノ三　柳光　岡本五郎
麻布區森元町一ノ二三　東松　桑原松太郎
瀧野川區田端新町二ノ二一　語好　前場源三

小石川區江戸川町十一　喜三香　戸塚君子
杉並區高圓寺三ノ二三八　可樂　渡邊弘
淺草區永住町七八　上誠　上田增三
王子區下十條町五一七　たつ子　宮島たつ子
芝區愛宕町一ノ一六　愛玉　加藤新之助
中野區川添町二〇　遊枝　近藤間弟
小石川水道町三三　香昇　田原政之助
淀橋區下落合町二ノ六二五　壽惠子　小山壽惠子
本郷區駒込千駄木町五〇　富士玉　藤井利雄
本郷區駒込林町一七七　大俵　清水繁藏
城東區大島町七ノ二二二　岡玉　古谷仙之輔
麻布區北日ケ窪町四〇　青松　西澤保三郎
四谷區右京町　枝蝶　佐藤佐一

謹賀新年

三福會

高野清遊
浮谷祖樂
三司改
佐久間福司
稲葉福代
竹本三福

綾秀會

石川治光
石塚歌吉
和田綾榮
南條壽光
山田壽瓢
藤原綾路
酒井龍司
崎村翠鳳
島田綾登
竹本綾秀

謹賀新年

安藤ごくろ

謹賀新年

白井清華

金田金鳳

謹賀新年

平田平和	大築葵
吉川浪補	菊池秋月

謹賀新年

近江清華

謹賀新年

坂倉素遊

野口みなと

木下呂壽

嵐司光

謹賀新年

岡田源	大用大嘉津
水戸部壽	武笠宏亮

謹賀新年

中澤巴

謹賀新年

松岡語松

小林和舟

謹賀新年

鈴木松寶

謹賀新年

宮本武藏

木村さかえ

北村三葵

謹賀新年

伊藤松鶴
長谷川文久
星野桔梗
吉田三芳
安藤光樂

（イロハ順）

謹賀新年

田口司重	平野ろ昇
原田越巴	淺田奇聲

謹賀新年

細川清

謹賀新年

岩木義雀	松本朝章
平井榮	小埜長とろ

謹賀新年

岩田末成	勝川勝川
根本團壽	乃村乃菊

謹賀新年

三ツ木美登利	高橋可遊
柳有明	松岡茂里雄

謹賀新年

高瀬操	湯原清司
錦錦松	廣瀬いろは

謹賀新年

吉田登盛	野澤粂造	久保田喜鶴	柴野筑波
阿部一	保谷紅司	小松〇六	西田可松

謹賀新年

日本帝都

義太夫因會

本部　京橋區新富町二丁目一五
電話　京橋〇三二四番

事務所　男子部　本郷區龍岡町二二
電話　小石川八〇六〇番
女子部　芝區西久保巴町四一
電話　芝二五七七番

◇ならぬ三味線はおもちやでござる

◇持て生れた名匠氣質

太棹の三絃
其他一般の三絃
は

◇技術と勉强を看板に

◇時節柄破格の大割引

御一報次第參上如何樣の御相談にも應じます

義太夫三絃師

菊屋

十河鑄吉

神田區小川町三丁目九番地
電話神田二九七五番(呼出)

謹賀新年

竹本津賀太夫

鶴澤司好
鶴澤好造

豐澤猿藏
豐澤猿三郎

謹賀新年

豐澤松太郎

豐澤猿之助

豐澤芳太郎

謹賀新年

鶴澤辰六	鶴澤寛三郎

豐澤良造	鶴澤紘平	豐澤團八	野澤道之助

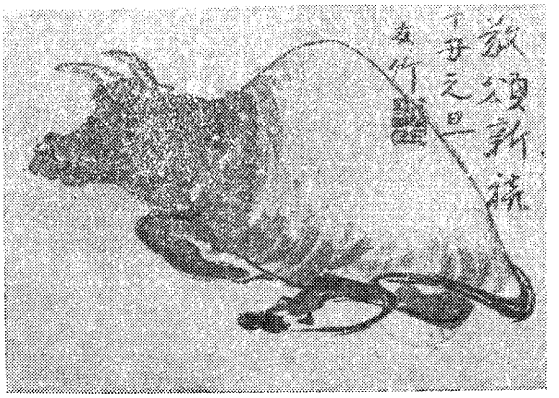
謹賀新年

竹本素女	竹本佳照
竹本駒若	鶴澤豊助

謹賀新年

東都五十義會

友竹畫伯筆



丑年にちなみて

芳河士

菅公の御手の梅に春立ちぬ

車場

爭ひに牛は眼もくれず春の風

軌にもかけずに牛の陽炎へり

五條橋

欄干に立つ若人や朧月

神崎東下り

詫びられて馬子の機嫌や春の風

新しい藝・古い藝

安藤鶴夫

義太夫の如き、古い傳統と風格を重んずる藝の中にさへ、私は新しい藝と古い藝のある事を痛感する。

かういふと、冗談をいふな、義太夫は古い藝だから尊重すべきもので、新しい藝などのあらうわけがないと、忽ちお叱りを受ける事であらう。

一應御尤である。

が、私ははつきり義太夫にさへ、新しい藝、いひかへれば新しい義太夫のある事を强調したい。

新しい義太夫といつても、決して近頃の文樂座のやうに、長唄だの、常盤津だの、清元だの、浪花節だのゝ中から、有り物を持つてきて、太い三味線でデツチ上げた所謂新作物の事をいふのではない。

もう一ついひかへれば、新しい風格といつてもいゝ。つまり昔乍らの語物に、新しい表現を與へる事である。

一にも二にも、少し義太夫道の解りかけた連中は、風格、風格とこれを尊重する。事實古典藝義太夫には、風格程尊いものもないのだ。つまり先人の表現を尊重する事なので、實際またこれが無暗に無くなつたなら、義太夫は浪花節同樣となり、忽ちその價値は地に墮ちやう。

たゞこの場合、私は風格といふものが單に芝居でいへば型同樣に、先人の表現技巧とばかり解されてゐる事に、非常な不滿を持つものである。芝居の型でさへ、私はたゞ形の上ばかりのものではないと思つてゐる。鼻高幸四郎の型だ、四代目小團次の型だといつても、普通これはたゞ形の上に現された所謂型だとは思へない。

義太夫の場合に、風格といふ言葉が、――單に麓太夫の風は、こゝをかうニジツたギンの音でいかなくては等といふ、たゞその形の上だけの表現と解されてゐる事が實に不思議だと思ふ。

私にはしむれば、風格の最も尊い所以は、決して形の上に現れた、つまり節なら節といふものに現れた型ではなく、それを表現した先人の精神にあると思ふ。

風格といふ言葉を、直ぐ型といふ風に解さずに、精神と解釋するのである。麓太夫の風、綱太夫の風といふ事は、決し

て麓太夫の型、綱太夫の型といふ事ではなく、麓太夫の精神、綱太夫の精神と迄、深く風格といふ意義を高揚して考へるべきだと思ふ。

もう少し風格そのものに就て考へれば、麓太夫だ、綱太夫だと稱するその風格なるものにも、どの程度迄信じていゝのか幾多の疑ひが生れてくる。

初演の太夫の風格が傳へられてゐると稱する語物もあれば、又、初演以後の太夫に依つてその風の變へられたと稱する語物もある。

確實なる音譜を持たぬ日本音曲では、どこ迄が實際その語物の風格であるかは早急には信じられぬ。そこに西洋音樂の音譜にのみ頼る藝術とは異つた味いもあれば、深みもあるが、それは同時にまた極めて典範が曖昧(あいまい)ともなる。

そこで風格なるものが、どこ迄信じていゝものか解らない事になると、結局は初演の太夫の風格といふものよりも、要はその語物の風格、即ちその淨瑠璃の原作が示す風格、つまり原作の精神を尊重する事が最も正しいといはねばなるまい。

そして初演太夫の風格の尊いところは、又實にこの原作の精神に觸れてゐるとこにあると思ふ。

今日、突然「太十」といふ語物を與へて作曲せよといつたところで、如何なる名人といへども、決して現在傳へられてゐる「太十」の如き立派なものは出來まい。こゝに我々は先人の偉大さをしみ〴〵感ずると共に、改めてその風格の偉大さに敬意を表する。即ちそれは、先人の原作に對する解釋力の偉大さに敬意を表する事である。

古典藝術の貴重なる點は、決してその表現力の爲ではなく、その精神が永久不滅である點にある。

義太夫といふ古典藝の尊重すべき點も亦同樣で、その表現が尊重さるべきではなく、あの永久不滅の義太夫古典精神が尊重さるべきものである。

そして、表現する力、表現する技巧といふ點は常に變化してゐる筈である。

何故ならば我々の文化は常に進歩してゐる。或は少くとも常に變化してゐる。表現力も亦同樣で、それはさま〴〵な時代に依り、或は人さま〴〵に依りそれは常に變化してゐる。表現する力、表現する技巧が固定する筈がないのである。

この變化あるところに、藝の動きがある。古い藝といひ、新しい藝といふのは即ち古い表現、新しい表現をいふので、以上の理由で義太夫にも當然、新しい藝があるわけである。

そしてそのどちらがいゝ等といふ事は、こゝでは問題ではないのだ。

今日義太夫道での古い藝、即ち古風な表現を持つ代表的な太夫は津太夫である。そして新しい藝、即ち獨自な表現を持つ代表的な太夫は古靱太夫である。

この場合、後者は一寸油斷をすると、獨自な表現を持つ爲

に道を踏み外す場合がある。古靱太夫の藝が常に我々には面白いのは、あの獨自な表現にあるのだが、又時々は同じ理由の爲にがつかりさせられる事がある。古靱太夫と吉右衛門とをよく藝風の相似から同一にいはれる場合があるが、私は寧ろ菊五郎の藝風に相似を感じる。菊五郎の院本物に於ける新解釋の演出が、實に先人以上の優れた場合があると同時に、又新解釋なるが爲に全然失敗する場合が、應々にして見られる。

義太夫が今日これ程迄に衰微した最大の理由は、この新しき解釋、獨自な表現を持つ太夫のゐない事に掛つてゐる。

明治期の二名人、攝津大掾と大隅太夫とが、同一の語物に於て、全然異つた藝風を示し、共にその原作の風格を少しも失はしめなかつた理由は、共に義太夫によつて眞の古典精神を保持してゐたが爲であり、又斯界をあれ程の盛況に導いたのは、共に新しき解釋と獨自な表現を持つてゐたが爲である。

たゞ茲で私の最も恐れるところは、新しい解釋だとか、獨自な表現などといふ爲の、勝手氣儘な旦那藝の獨り合點である。

要は飽く迄その淨瑠璃の持つ風格を充分研究し、尊重し、その上での結果をいふもので、これは天才以外の出來得ざる事である。

私は津太夫の古風な藝風を尊重すると同時に、古靱太夫の獨自な藝風に、義太夫道の將來を期待するものである。

謹賀新年
帝都素義聯合會

謹賀新年
なにわ鮨
お催しのおすしは何卒弊店へ
御下命の程願上ます
なにわ
本所・吾妻橋畔
電話墨田八一九番

道樂根生

平山蘆江

義太夫をやめて丁度七年になる。やめた當時は、悲痛な決心で、口の中でだつて、一口淨瑠璃だつて口にはすまいといふ心持だつた。あれほど熱心におやりになつたのに、よく思ひ切りましたねと、私の身邊の人たちは不思議がつた。内しよでやつてゐるんだらうとせせら笑ふ人もあつた。併し、私の强情と、私の潔癖とが内しよ事一切を私自身にゆるさないので、他人のを聞く事だつて憚かつたくらゐだつた。

やめるのには、事情止むを得ないわけが私の身邊にあつたのだが、今は發表しない。約そ義太夫に限らず、何かの道樂をやつてゐる人が、大きくなり小さくなり、當然ぶつかる問題なので、もし、私の事情を發表したら、誰れもかれも、私に向つて、なるほど尤もだ、さぞ辛かつたらうと云つてくれる筋合の事情なのだ、

七年も經つたこの頃では、いくらか心持が和やかになり他人のを聞いても左程辛くは感じなくなつたが、一時は世の中が眞暗になつた。

曾て、大好きなたばこを丸二年間止めて見た事がある。あの時も辛かつたが、義太夫をやめるのはどうして〳〵、たばこどころの比ではない。

いくら未練たらしいと我身を叱りつけても、あとから〳〵と、未練やら愚痴やらが出て來て、ともすると、涙がぽろぽろと、ひとりでにこぼれて來た日もあつた。こんなに愚痴つぽいおれではなかつたがと、しまひには情けなくさへなつた。

よく〳〵考へると、莫の方は、あんまりやめられない〳〵と、人がいふので、なあに、やめられないなんて事があるものかといふ意氣でやめたのだ、云はばお調子に乘つてやめたのだが、義太夫の方はさうでなく、周圍の事情が、止めなければならなくなつた、いはば、つめ腹を切らされたやうなものだから、未練や愚痴といふよりも、くやしかつたのだらう。

私の義太夫は丸七年間、殆んど一日も休みなしといふ精勤ぶりだつた。一年一段ときめて丁度、七段上つた。寒中だつ

て浴衣一枚で稽古をしてゐて、而も浴衣が絞るほど汗をかいた。私の稽古ぶりを見てゐた中村芝鶴君が、

「横から見てると四十幾歳の先生ではなくて、子供のやうにしか思はれない」と云つた。

私の友だちは皆、私の事を半氣ちがひだといつた。

眞夏などは、朝出かけに一段稽古して、汗を出すと、終日汗が出ない。朝の中に絞りつくすのかも知れませんねと師匠は云つた。

だから止めた當時は、胃がわるくなつたり、身體の工合がわるかつたりした事は事實で、小說を書くのも辛い事があつた。

只さへ、坐り込んでばかりゐて運動不足になりがちの稼業だから、胃がわるかつたり腹が減らなかつたりすると、どうも考へがまとまりにくい、此分で行つたら、義太夫をやめたためにものが書けなくなるのではあるまいかとさへ思つたりした。

兎に角義太夫といふものの力の强さは、やつた人でなければ判らない。義太夫をやりはじめてから芝居を見たつて、他の邦樂を聞いたつて、馬鹿々々しくて、はりあひがなくて、一切合切を輕蔑したくさへなつた。それほどの義太夫を思ひ切つたのだから世の中が暗くなつたと覺えるのに無理はあるまい。

ところで、前にも云つた通り、やめて七年にもなると、くやしさがいくらか薄らぐと見えて、近頃では鼻うたがはりに、一口ぐらゐは呟く事もあり、先日などは、鬼怒川溫泉へ行つてゐる時、友だちが、やつて見ろといふので、寺小屋の泣きわらひをすこしばかりやつて見たが、熱心に稽古してゐる時、どうしても出來なかつたところが、器用に出來るやうになつてゐる。人一倍、調子のはづれる私が、どうやらはづれなくなつてゐる。妙なものだ。一生懸命やる時は夢中であと先がわからなくなるのだが、熱をさまして少しはなれて見ると、自分の疵も判り、聲のつかひ方に工夫がつくものらしい。此分ならば七年間の强情をゆるめて、氣がるな氣持で稽古をしなほしたら、前よりはずつと巧くなつてゐるのではあるまいかなんて慾が出て來る。

やめたといひ、やめるといふ側から、もうこんな事を思ひはじめるところが、やつぱり道樂なんだらう。羨やまし思ひ切る時猫の戀とかいふ俳句があつた。あの氣持だ。つまり道樂根性なのだ。

謹賀新年

黑川叶

今はむかし

久保田金僊

自分が京都に居た頃、よく父につれられて芝居を見せられた、父が京阪の俳優達に交友があつた關係上、そして技藝者ともまみへる機會が多かつた、前々の紋下攝津大掾とも亦前紋下の越路太夫とも宴席をともにすることが度々あつた。攝津大掾はいつの時でも謹嚴そのもののやうに端然と座にあつたことを子供心に印してゐる、そして藝談については相當多辯であつたが、自分にはそれは記憶が薄い、唯好々爺であることだけをまざ〳〵と覺へてゐる、越路は趣味の多い人であつたと、記憶してゐる、彼が時鳥を飼つてゐたことは有名であつた、大阪の彼の住居は南の狹斜の巷で相當賑やかなところであつたが、彼は苦茗を啜り時鳥の鳴く音に耳をすまして、己が無我に入る虚心の鍛錬さがどのくらい彼の技藝に光りを磨したことか、想像にあまりある。

攝津の美音は今猶耳底にのこつてゐる、艶物の名人でその語り口に於ては正に陶醉させられるものがあつた、越路はどつしりとした堅實さがあつた、父の遺して置たスケッチブックをひろげると兩者の寫生が可なり筆にしてある、今は皆故人となつてしまつた。

明治二十年頃、中村宗十郎が東京から大阪へ歸へつて來て、東京で當時唱道された演劇改良の餘波を受けたため、大阪で改良芝居を浪花座で旗上げした、その辯、東京では團十郎と相入れられなく、互にしのぎを削つたものであるが歸阪後の彼れは早速父の許を訪れ、此くわだてに就て相談した、父は大いに其計企を贊成し、茲に一番目は「西郷と月照」といふ史劇もの、二番目と中幕は覺へてないが切の所作事＝といふか、おしまいに仲國小督を訪ふ一幕を演じた、一番目に宗十郎は月照を演じこれに義太夫を點綴した、西郷は先々代嵐橘三郎であつたが、これは大舊式でこれには末廣屋も餘程困つたやうである、あまり義太夫に拘泥し乘り過ぎる感があつたから不評であつた、宗十郎の月照は如何にも其人らしくサラツとした藝風が寧しろ義太夫をよく、いかしたものである。最後の仲國は父が演出なり舞臺監督といふ役を引きうけ遺憾

なく末廣屋と共鳴して思ふまゝにふるまつた、幕があくと、舞臺一面、眞物の薄原（この薄は阿部野から毎日刈つて運んだもの＝當時阿部野は一面の薄原であつたらしい）其中へ丸ものゝ屋臺を一軒こしらへ、これは小督局隱れ家である（丸ものゝ屋臺をつくつたのも此時がはじめてである）照明のない當時であるから例の天井から釣り下げられたランプを全部消燈し僅に隱れ家の燈火、即ち眠り燈臺の明りと月の光りだけで見せたのであるから眞ツ暗であつた、宗十郎の仲國は五位藏人の衣裳を高田裝束店に誂へ古實通りに、小督局は先年なくなつた中村鴈次郎であつたが、これも五ツ衣を同裝束店に誂へ、女の童は風紫琴（故人）、そして仲國の乘馬＝寮の馬の口取りは現在の實川延若であつた、何れも史實通りのこしらへ、全くこの衣裳を着るのがはじめてゞ俳優は勿論衣裳方さへどう着せてよいのか知らなかつた、それが爲め父は臨時衣裳方まで勤めたのである、併し折角苦心のこの衣裳もあまり暗いので見物にはよく見へなかつたそうである、そして一さい鳴物拔き唯幕開きに小督の彈く琴の音があつただけ、見物はたゞあつけにとられて、改良芝居といふものはくらいものだとこぼしながらも烟に卷かれ靜まりかへつて見てゐたのである、當時舞臺監督の助手格？として働いた早川龍介翁（後年愛知縣選出代議士＝前年物故）が月の照明を引きうけ道具幕のうしろでポール紙を圓く切り拔いてそのうしろで松脂を焚いて明りをうつす趣向、これがなか〳〵の苦心であつたといふ、或る日、道具幕の破れから松脂を焚く烟りが洩れて舞臺から見物席に流出した、早川翁もハツと困つたが今更どうすることも出來ない、殊に舞臺では仲國と小督の問答でクライマックスに達してゐる時なので餘儀なく其のまゝ明りを焚きつけてゐた、烟りは益々濃厚となつて四方りはもうらうとなつてしまつた、見物は愈々不審議がつて、中にはこれを善意に解釋して嵯峨野の場面であるから桂川の川霧がぼーつと一面に籠つた樣を見せた實にこつたものだと言ひふらした、それが爲め此改良芝居第一回の興行は大入り滿員つゞきで何が何やらわからずしまひに終つたといふ滑稽談がある、この芝居は二回までやつてとう〳〵お仕舞になつてしまつた、今から思ふと眞に隔世の感がある。

謹賀新年

歸山歸世花

義太夫に節がなければ

坂本猿冠者

落語に「寢床」と云ふのがある。自分が義太夫を習つてゐた時代には、百も承知、二百も合點で、屢この「寢床」を繰り返した。

語つてゐる中に、調子が脫れたり、奇聲が咽喉を突いて發するたび「寢床」だなと思ひ乍ら語つたものだ。

流石に他人にきかせる勇氣はなかつた。いつもきかされる連中は、家族の者か出入の藝妓達であつた、かうなると增々「寢床」だ。

それでも肩衣から見臺まで新調して、みてくれだけは立派な太夫であつた、只情けない事に師匠がない、師匠がなくてよく語れたものだと呆れるかもしれないが、蓄音器で覺え込むほど器用でない自分は最初の手ほどきを土地の大姐で藝妓を廢業してからは、遊び半分自分のやうな寢床連中を敎へてお小遣取にしてゐた小菊さんと云ふお婆さんに敎はつたのだ。

震災後は小菊婆さんが死んでしまつたので土地の義太夫藝者高之助から敎へられた、とは云ふものゝスピード義太夫で、一段を半月で上げてしまふと云ふ習ひ方では滿足に語れる譯がない。

それでも上げた語物を數へると「太十」「辨上」「帶屋」「陣屋」「酒屋」「六段目」「千兩幟」とまだあるかもしれないが數え上げてみた處で一つも今では語れないのだから無駄な事故省略する。

義太夫をやつて今でも得をしたと思ふのは「帶屋」で、笑ひを覺えた事だ、それ以來空笑ひ、世辭笑ひ、相槌笑ひが出來るやうになつたのは全く「帶屋」のお陰であつた。

詞は全部芝居がゝり、これで節さへなければ義太夫はいつまでもやつてゐたかもしれないが、節があるのでやめてしまつた。

そんな弟子を持つた師匠こそ災難だ

義太夫の『ゆとり』

北仙

若かりし時、志渡寺を稽古した折りに『力が入り過ぎる』と謂はれた事が、四十年後の今まとなつて初めて解けた。

力が入り過ぎる、如何にも、一角の太夫さんの樣に聽こゆるが、實の處『力み過ぎる』の言へ廻はしであつた。最も初心者が、力一杯夢中となつて力む事の道程を踏むべきは當然で、聲を盜んだり、ケレンを眞似する樣では大器とは成り得ない。謂はんとする『ゆとり』とは、八分目に力を入れて餘韻品位を奧床かしくする工風の餘地に二分を餘して、兩方合せて十分の全力となる事である、カチ〳〵になつて了つては、ゆとりが有るとは言はれぬ。

こゝに又東廣さんを引合に出すと、十月の放送に團司、小住さんとのコンビで、東廣の由良の助が其の言葉の巧妙さ、名優の名調子恐らく驚嘆そのもので、其の『ゆとり』の點に於て、小住さんの平右衛門、團司さんのお輕、勿論肉聲でもなく、切り合ひ、はね合ひのセッパツパの場合とは申しながら『ゆとり』の點に缺けて居りはせなんだか、過ぎたるは及ばざるに近かしとならぬ點が『ゆとり』ではあるまいか。

俳諧 伊賀越道中雙六

杉山田庭戯作

發端 鶴ヶ岡の段

畏掛けて隣りの猫を二月寒む

第二 靱負屋敷の段

柴垣の隔てぬ心暖き

春月や討つて立退く又五郎

第三 圓覺寺の段

方丈の簷先深し燕の巣

呉服屋十兵衛

陽炎や忍ぶ相良へ道案内

預りの印籠腰に春の風

鳴海の自害丹右衛門の討死

凧の絲もつれ〳〵て仕舞ひけり

第四 郡山宮居の段

宇佐美の苦心

あれこれを思ひ餘寒の庭神樂

第五 郡山屋舗の段

いとけなき戀女房や朧月

饅頭を喰ふて契りの春淺し

花嫁は乳母の添乳に宵の春

柴垣の最後

雲に入る鳥ならなくに聲悲し

段切れ

それ〴〵に名殘々々の霞哉

第六 沼津の段

身に入む情ゞ平作は千鳥足

お米

一輪の野菊詫しや西日影

平三郎

秋風や義理と血筋の道分石

千本松

子を思ふ重荷の愚痴や星月夜

アレ聞いたかいやゝ誰も秋の聲

第七　關所の段

手を引いて戀の關所を雪の道

政右衞門驅けつける

一足を先へ櫻田雪の關

第八　岡崎の段

詐りて身を寄す今宵暖め鳥

煙草刻む燈火更けて雪の聲

吾子を刺す唐木

血祭の氷の双呑む思ひ

お谷

抱き締めて冷たき吾子(アコ)の頬に頬寄す

やがて吉左右

道引きはお袖道心の鐘冴ゆる

第九　伏見の段

醫者のこゝは伏見の竹の秋

十兵衞最後の一言

春月の小椋堤を伊賀越えに

多年の本望今此時

去ぬ雁の先へ廻りて月の途

第十　敵討の段

春の月胸も志津馬の雲晴れて

作者十五年前月ヶ瀬探梅の歸途鍵屋の辻の仇討紀念碑の前に立ちて一句せり

樹の間凄くも如月の五日月

天狗會

三宅孤軒

年の瀬を火桶抱えて、襟まきに埋もれてゐましては、いろは歌留多の『樂あれば苦あり』の隱居めきますから、一番元氣を出して『あした待たるゝその寶船』と陽氣な處をお目にかけ、明日の活動に備へたく、左の番組通り忘年義太夫天狗會を催し、その名にちなむ奥山の天狗と鼻くらべをいたしますから、永當々々御光來の上お笑ひの裡に、年を忘れ一陽來福の春をお迎へ遊ばされる事を一同に代つて申上げる者は、金泉女將、一直女將。

と云ふ案内狀に

讃　平山蘆江

ねむけさましと觀音さまへ
聞かす天狗の歌念佛

讃　三宅孤軒

奥山に凧おこす天狗哉
泣きおとしおかしくなるが年忘れ

以上二人の裏書まで添えて十二月十九日淺草公園の一直での催し、三味線は公園の義太夫藝妓富之助が主に承はり、猿平、司好も助演して、細の人、唄の人が肩衣をつけて見臺にしがみつき、踊りッ子は義太夫振りと云ふ處で、文樂とは違つた味を見せ、又お客樣筋がとび入りでアツト云はせやうと云ふ趣向、然し中には義勢君や松樂君、夢公君と云つた黑ツぽい處もあつて中々の盛況、廊下には召上り御勝手次第とある壽司の模擬店を設けてお客樣を飽かさず、大切に野崎村を据えて、主催者の金泉のお染、一直のお光、秀華の久作、萬助の母親、もとめの久松で富之助の紘に富千代のツレ引と云ふお見當てで客を引とめた處なども立て方がよく、酒屋、炬燵、鮮屋の義太夫振りの外に、公園藝妓の踊り子たる兒雀、大こく兩人三番叟四丁四枚に囃子まで入れての大掛りで評判もよく大出來であつた。

謹賀新年

淺草音女會（イロハ順）

米惠比壽家富千代
浪花家かきつ
福叶家小まち
新春菊の家綾春
光榮綾榮
高本喜代葉
竹本志磨吉
同〃春
新豊の家昇之助
若松家松治

幹事　惠比壽家富之助
日の家八重吉

（役談相）
吉福助
本平長
井谷川
榮文久

再び素義界へ進出に就て

三ツ木美登利

昨年二月に私は齒がなくなりまして、好きな淨瑠璃が語れなくなつてしまひましたので、皆様の許へ淨瑠璃と絶縁の宣言に理由を加へて御通知致しました。

ところが最近阿松氏が私の所へ見えられまして御親切にも藥を御持參下され、この藥を齒につければ、三四十分位は大丈夫唸れると敎へてくれました、これは誠に有難いと思ひまして、恰度田舍の方へ參りました折に、そつと用ひて見ましたところが、成程三四十分は唸れます。

實際再生の思ひが致しました。折も折大塚三鳳氏が見えられて、曰く、

『俺も暫く義太夫を休んでゐたが、こんな事では、益々老ひ込んでしまふばかりだから、最近また俺もはじめたよ、だから君も是非やり給へ、ソレ、今度出來たレコードで稽古の出來る松葉會といふのが、貴重な時間もつぶさずに、思ふ存分出來るし、又、月に何日か廣助師匠が上京して、三味線に合せてくれるといふ、實際輕便な會だから入會したまへ』

といふ事なので、私も入會させて戴きそろ〳〵と唸る事に致しました。

一寸氣まりの惡い感じも致しますが、又、考へやうによつては別に誰方様にも御迷惑をおかけ致したわけでもなく、かへつて同好の士は、癪物が又そろ〳〵唸り出したといふ事に、結局は喜んで下さる方はあつても別に笑ふ方もなからうと自分勝手な理屈をつけて、ぼち〳〵唸り出しました。

よろしく御賢察の程を乞ふ、猶私が再び語り出しましたといふ一文をお目にかける次第です。

謹賀新年

牛込區早稻田町五八
栗原印刷所
電話牛込五九六六番

義太夫お勸めいろは譯

森　三好

い　伊の一番は健康第一。皆樣やりませふ

ろ　義太夫を論より證據御存じの。語れば目も增す元氣出る

は　博學多才の識者のお話し。感賞あるは義太夫文章

に　日本固有の古典の藝術。益々隆昌盛んにしませふ

ほ　ほんに良い音は義太夫三絃。日本は元より外人賞讃

へ　下手上手を聞くよりも。文章情愛味わいませふ

と　年のお方も諸共に。青年男女も進めます

ち　力を入れて語りませふ。聽良しやり良し面白し

り　陸軍海軍慰問の時も。義太夫入りの舊劇歡迎

ぬ　盜人殺人强盜罪は。義太夫語らる者に無し

る　累計算して調べて見れば。帝都の愛義五千人

を　老ひては子に隨ひ。娛樂は義太夫に隨ひませふ

わ　僅かのお暇も義太夫の。研究練磨に努めませふ

か　關東關西滿鮮迄も。取つて讀みませふ

よ　太棹を世の中に廣めて勸善懲惡の。義太夫會をやりませふ

た　誰でも出來ぬ者はない。熱心練習努力奮勵

れ　連續的にやりませふ。休むと忘れる下手になる

そ　爭鬪喧嘩するよりも。一段語つて喜ばん

つ　鶴は千年龜は萬年。好な義太夫五萬年

ね　年頭旁々語りませふ。今年の無事を壽

謹賀新年

箱根强羅溫泉
茶代廢止
觀光旅館
電話 宮ノ下 〔長一六〇番 三一一番〕

上州梨木鑛泉
梨木館
上州勢多郡黑保根村

伊香保溫泉
横手旅館
電話 〔八番 七五番〕

ぎ祝はん

な 仲良く彈たり語つたり。研究練磨と老も忘れる

ら 樂して樂知らずでなく。勞して勞を忘れます

む 昔の人の辭色を。聽て知り居る人は無し。一聲、二學、三凝か

う 謠つて語つて彈きませふ。昭和十二の春を迎へて

ゐ 五十義因に嬉し會。此の他の會も武運長久

の 咽元過れば熱を忘るゝ。一段語れば爵氣忘るゝ

お お正月書初め買ひ初め語り初め、和合に家内笑ひ初め

く 苦勞して覺へた義太夫。如何で語らで置くべきや

や 止めて止まらぬ義太夫は。一世位か二世迄も

ま 萬古末代變らぬは。我日の本と古典義太夫

け 稽古研究競技の會も。休まず益々行りませふ

ふ 普及機關の太棹を。成るべく大勢求めませふ

こ 是から年に一回は。各會集つて十分會

え えてに帆を上げ名譽上げ。語つて評判上げませふ

て 天狗の鼻は仲々折れぬ。各々固有の特徴たつぷり

あ あちらこちらの御方々も。合わして合ふは義太夫許り

さ 誘ひ誘はれ朋友も。聽きに行きませふ義太夫を

き 聽いて極樂見て立派。道は日本の國粹尊重

ゆ 行けば行く程遠ひは修業。上に限り無し一生學問

め 名人達人何れの方も。始めは稽古と練習で

み 見知らぬ殿御も御婦人も。義太夫合して萬古の交際

し 手練の三味線鳴り渡り。上手な語り間に響びく

ゑ 衞生思想の嚴しき今日。義太夫語れば強くなります

ひ 人の誹評は安くして。自己の藝術出來難し

も 最少し倶樂部も努力して。聽客多數お集め希望

せ 精一杯働ひて。夜は娯樂に義太夫を

す 好は物の上手なり。語りも彈も皆樣先生

ん 運動になる義太夫は。身體强健人生幸福

謹賀新年

◆花輪◆花束◆花籠

御送迎・御佛事・御見舞は何卒弊店へ御用命願上候　新花・廉價・迅速は弊店の特色

花

上野　地下鐵ストア
坂田盆栽部
下谷南稻荷町（青バス車庫前）
サカタ・フロリスト
電話（下谷）六一八一番

太棹社彙報

▽通信又は番組御送附なきものゝ、本欄に掲載洩れは御用捨を願ひます。
▽開催前月に詳細を報道したものは開催後の記事を略します。但し語り物又は出演者の變更された場合は重れて掲載する事もあります。
▽太棹巡禮記又は會報にありますものは本欄にその重複を避けます。
▽特種の催ほしの外前置きを略します。

――記　者――

大阪に於ける師走の二大會

第一回競演倭大會

前號『大阪版』に既報の通り、小西い京、田邊い京、橋本一花、車戸轟、吉田千歳、武田眞若氏の創立にかゝる倭大會は十二月七日より十日迄四日間堀江演舞場に於て午前十時より小西い京、竹本角太夫兩氏審査のもとに華々しく開催されたが、採點の結果は左の通り、なほ四日間とも左記の掛合を序席に立てゝ、師走の浪花淨界を飾つた。

七日＝（鮨屋）權太（い京）お里（紅雀）村の歩き（梅光）捕手（信濃）梶原（小確）六代君（清司）内侍（轟）維盛（田雀）彌左工門（一花）絃（新造）八日＝（赤垣）源藏（千歳）源左工門（眞若）おつぎ（梅光）曾平太（轟）母親（小確）絃（友平）九日＝（菅四）源藏（眞若）戸浪（紫紅）小太郎（清司）御臺若君（紅雀）百姓（吳山）小供（璃鶴）玄蕃（清水）千代（よふく）松王（義豊）絃（稲丸）十日＝（陣屋）熊谷（信濃）義經（鶴峰）藤の局（山鳳）彌陀六（轟）軍治（千歳）梶原（眞若）相模（紫紅）絃（稲丸）

採點表

俳名	角太夫氏	い京翁氏	合計	平均
眞若	一九二	一八五	三七七	一八八
い京	一八八	一八二	三七〇	一八五
一花	一八五	一八二	三六七	一八三
山鳳	一八二	一七九	三六一	一八〇
乙鳥	一七八	一七五	三五三	一七六
紫紅	一八〇	一七一	三五一	一七五
錦昇	一七三	一七〇	三四三	一七一
信濃	一七六	一六七	三四三	一七一
紅雀	一七五	一六四	三三九	一六九
清水	一七二	一六五	三三七	一六八
とんぼ	一六三	一六六	三二九	一六四

タツミ	一六三	一六三	三二六	一六三	
金聲	一五七	一六九	三二六	一六三	
梅光	一六五	一五六	三二一	一六〇	
よふく	一五五	一五五	三一〇	一五五	
一花	一四〇	一六四	三〇四	一五二	
松葉	一五二	一五〇	三〇二	一五一	
小確	一六〇	一四〇	三〇〇	一五〇	
梅曲	一五〇	一四五	二九五	一四七	
正若	一五三	一四二	二九五	一四七	
松雀	一三四	一六一	二九五	一四七	
良齊	一三八	一五三	二九一	一四五	
あしべ	一五五	一三六	二九一	一四五	
喜若	一三八	一四八	二八六	一四三	
小むら	〇	一四一	一四一	一四一	
志ほう	一四五	一三五	二八〇	一四〇	
田雀	一四三	一三六	二七九	一三九	
晴海	一三四	一四五	二七九	一三九	
鶴峯	一四一	一三七	二七八	一三九	
美よし	一四二	一三〇	二七二	一三六	
蘭瓶	一三〇	一三八	二六八	一三四	
永寶	一三二	一三五	二六七	一三三	
いづみ	一三一	一三二	二六三	一三一	
小冨士	一三七	一二五	二六二	一三一	
道勝	一三三	一二七	二六〇	一三〇	
花昇	一三五	一二五	二六〇	一三〇	

晴山	一三六	一二三	二五九	一二九	
公木	一三〇	一二六	二五六	一二八	
やなぎ	一二七	一二八	二五五	一二七	
仙龍	一三三	一二二	二五五	一二七	
可昇	一四四	一一〇	二五四	一二七	
璃鶴	一二六	一二六	二五二	一二六	
宮路	一三〇	一二〇	二五〇	一二五	
清司	〇	一二〇	一二〇	一二〇	
都華	一三四	一〇六	二四〇	一二〇	
源章	一三一	一〇八	二三九	一一九	
柳木	一二六	一一〇	二三六	一一八	
吳山	一一五	一一八	二三三	一一六	
駿若	一三五	九八	二三三	一一六	
琴城	一一七	一一五	二三二	一一六	
呂石	一二三	一〇八	二三一	一一五	
東昇	一二一	一〇九	二三〇	一一五	
榮鳳	一一九	一〇八	二二七	一一三	
アリオ	一二三	一〇三	二二六	一一三	
巴司	一二五	一〇〇	二二五	一一二	
文昇	一二五	一〇〇	二二五	一一二	
一美	一二四	一〇〇	二二四	一一二	
秀玉	一一八	一〇五	二二三	一一一	
三ッ輪	一二〇	一〇三	二二三	一一一	
貴木	一二二	一〇〇	二二二	一一一	
轟	〇	一一〇	一一〇	一一〇	

司鳳	一一五	一〇五	一〇五	二二〇	一一〇
鳴門	一〇五	一二二	一一二	二一七	一〇八
藤花	一二二	九三	二一五	一〇七	一〇七
花鳳	一〇四	一一〇	二一四	一〇六	一〇六
秀玉	一〇七	一〇五	二一二	二〇八	一〇四
葛城	一〇六	一〇二	二〇七	一〇三	一〇三
登隅	一一〇	九七	二〇七	一〇三	一〇三
錦城	一一二	九五	二〇七	一〇三	一〇三
丸〇	一一四	九三	二〇七	一〇三	一〇三
雁昇	一〇四	一〇二	二〇六	一〇三	一〇三
七三五	一〇九	九二	二〇一	一〇〇	九九
老若	一〇八	九〇	一九八	九九	九八
古林	一一二	八五	一九七	九八	九七
榮	一〇〇	九五	一九五	九七	九七
吟青	一〇三	九一	一九四	九七	九一
い光	九五	〇	九五	九五	九五
芳調	九二	九〇	一八二	九一	九一
重華	九七	八五	一八二	九一	九〇
春花	八二	九八	一八〇	九〇	八八
万兩	九二	八四	一七六	八八	八八
佳居	九〇	八〇	一七〇	八五	八五
船樂	八〇	八三	一六三	八一	八一
染昇	七五	七〇	一四五	七二	七二
雅昇	七〇	七三	一四三	七一	七一
三昇	七二	七〇	一四二	七一	七一

富久司　七二　六九　一四一　七〇　都可佐　六八　七二　一四〇　七〇

淡路人形藝術觀賞大會

淡路人形芝居保存協會主催、大阪淨瑠璃同好者諸會後援の淡路人形觀賞大會は十二月七日より三日間毎日正午より鶴橋劇場に於て開催非常な好評を博した。

初日＝神舞式三番叟。賤ケ嶽七本槍（大德寺燒香の段、中川清秀砦の段、柴田勝家陣屋の段、足利政右工門庵の段、賤ケ嶽大合戰の段）太夫（大內太夫、三木太夫、上總太夫）絃（權七、吉右工門）先代（太郎、雛駒）阿漕（鯉昇、朝子）朝顏（南子、綱平）志度寺（千笑、仙二郎）忠四（松葉、雛駒）大切（早替播州皿屋敷）

二日目＝神武舞三番叟。三國傳來玉藻前旭袂（大公望魚釣の段、院野仲王御殿の段、高樓の段、道春館の段）（太夫、絃前同）寺子屋（八角、新造）安達（宮路、緋佐子）鰻谷（生樂、新造）瀧（うろこ、新造）玉藻前神泉院（早替）三日目＝神舞式三番叟。富士卷狩曾我兄弟仇討（庄嚴寺內の段、大磯揚屋の段、裾野卷狩の段、仇討の段）（太夫、絃前同）忠六（一力、緋佐子）油屋（千鳥、新造）先代（可昇、新造）八百屋（昇玉、新造）忠臣藏五段目（早替）なほ二日目三日目は大切に昇玉、うろこ、千笑、鯉昇、太郎、可昇、生樂、南子、千鳥、宮路の諸氏にて七段目の掛合があつた。

兜會新名簿

昨秋十月十一日淸水ビルホールに於て秋季大會を開催した兜會は、會長を始め役員の滿期につき改選の結果、會長に鈴木松實氏、副會長に近江淸華氏が新らたに就任され、元會長中澤巴氏は相談役に其他の役員の顏ぶれは當時本誌に發表したが、同會は改選新名簿を印刷して年末に各關係者へ配付をした。

會長（鈴木松實）副會長（近江淸華）相談役（中澤巴）顧問（鈴木和樂、寺岡三幸、桑原美峰）名譽顧問（福田喜撰）特別會員（田林南海）幹事長（本多可笑）會員イロハ順（本多加保留、笠松松蝶、加藤兜、米澤春樂、玉上喜聲、根本團壽、中山美浪、直井雛司、松田和可葉、藤田其晶、荒木泉、淺原朝正、北村三葵、仙臺八雲、日野靜波）の諸氏

謹賀新年

民事
商刑事
特許事件
迅速懇切に取扱ふ

辯護士
法學士
飛石久太郎
俳號 かなめ
東京市牛込區東五軒町五四
市電東五軒町停留場際
電話牛込㊀五七四七番

無名會忘年大會

十二月八日午后四時より丸ノ內電氣倶樂部に開催。

宿屋（悟樂、猿藏）毛谷村（和樂、猿之助）堀川（國聲、猿三郎）長局（たもつ、辰六）新口村（美峰、猿之助）先代（巴、猿之助）

福島義太夫大會

福島縣平町には豫てより鶴澤六太郎師が稽古所を設置し、鈴木錦祥氏肝入りの若葉會は日に〳〵隆盛を增しつゝあるが、十二月八、九兩日午后六時より聚樂館に於て大會を開き、非常な人氣を以て會員諸氏の力演は頗る好評を博した。

初日＝聚樂町（きぬ子）先代（花舟）松王邸（才司）寺子屋（六甫）合邦前（夏井）本下（錦清）沼津（龍清）堀川（瓢）合邦奥（錦祥）

二日目＝先代（きぬ子）中將姫（才司）安達（六甫）太十（夏井）河庄（瓢）鳴門（龍清）玉三（錦祥）以上（絃）鶴澤六太郎、同友千代。

第二回松葉會

十二月九、十、十一の三日間午后五時より麻布公會堂に開催。

九日＝太十（錦松）先代（白井清華）伊賀五（宮古）鮨屋（美登利）忠四（越巴）十日＝先代（素鳳）太十（奇聲）陣屋（玉五）宿屋（銀水）喜內（越巴）鮨屋（國聲）十一日＝忠六（奇聲）鮨屋（松樂）紙治（玉五）油屋（素鳳）山名屋（越巴）壺坂（國聲）以上（絃）豐澤廣助

巴津天會忘年會

同會の忘年會は十二月十五日午后四時より文化倶樂部に開催、終演後例に依り宴會に移り頗る盛會を極めた。

殿中＝師直（染廣）若狹之助（駒蝶）判官（歌子）本藏（勇昇）裏門＝勘平（勇昇）おかる（歌子）伴內（染廣）勝助。四段目（巴津昇）五段目（成鳳、和光）六段目（勝助）戀十（和紅、たつ子）本下（絃醉、染廣）忠九（天昇、巴津昇）油屋（貢玉、染廣）七段目＝由良之助（天昇）おかる（染廣）三人侍（彌國太夫、勇昇、絃醉）平右工門（巴津昇）力彌（歌子）仲居（駒蝶）絃（文之助）

綾秀會

例に依り坂東勝治身振劇入にて十二月十九、廿の兩夜大塚豐島亭に開催。

初日＝白浪五人男（掛合）新口村（綾登）辨慶（龍司）菅四（壽瓢）絃（綾秀）

二日目＝合邦（壽光）壺坂（綾登）太十（龍司）安達（壽瓢）絃（綾秀）

演藝大會

京橋の佐倉家に出張稽古中の松葉家豐澤廣助師は、十二月廿日夜麻布公會堂に演藝大會を開催し、純益金は餅の搗けない方々へと寄附をした。この美しい企て

謹賀新年

貸席 並木倶樂部

淺草・雷門
電話淺草一二三五番

義太夫席として皆様のお氣に召す倶樂部で御座います。
どちらからも最も便利で、落ついて聽くお方まできつと喜びます。
乘物は電車・バス・地下鐵いづれも雷門下車、直ぐ近間でございます。

に各方面の多大なる贊助に頗る盛會を極めたが、松葉家は新曲修善寺物語（同師作曲）を演じて好評を博した。

子褒め（三遊亭金太郎）彌作（野澤道之助、竹本越道）月形半平太（南部朝男）啞の釣（蝶花樓馬樂）修善寺物語（松葉家、野澤道之助）提灯屋（柳家小さん）お里澤市（金川文華、金川文太郎、金川文三）

熱海『聚樂』の發展

本誌愛讀者須田町食堂加藤清三郎氏經營の熱海『聚樂』は熱海の浴客を一手に引受くべく、增築に改築に素晴らしい勢ひを以て發展しつゝあるが、舊臘二階の家族風呂を廢して婦人專用風呂、化粧室、理髮室を增築し、三階は和洋折衷五十疊敷、四階は純日本風の三十疊敷の宴會場に改築、面目一新萬客の觀迎に努力してゐる。

女子義太夫勉强會

春秋二回芝飛行館で佳照會を公演し、好評裡に成績を收めてゐる竹本佳照師は、新春早々女子義太夫勉强會を組織し、その第一回を一月十七日午後五時半より雷門東橋亭で開催する事になつた。番組は左の通り。

舟別（佳世子、佳由）白石（佳由、佳仙）太十（佳仙、佳由）新口村（昇登、仙君）寺子屋（素廣、巴佳）宿屋（綾千代、猿玉）先代（佳照、清一）大切（五條橋）牛若丸（佳世子）辨慶（佳仙）弦（仙君）ツレ（佳照、佳由）

會報

大東京嬉會

松組幹事　森　三好

一月十日午後五時より深川永樂樓上に於て會員一同新年御芽出度うの年賀大宴會を開催、會長始め全員擧つて本年は一層輝かしく謳語躍進すべく活氣を呈し、賑々敷く諸種のかくし藝に夜を更かし午後十時閉會せり。

謹賀新年

岸根の笹雪

大阪

文樂座初春興行

菅原傳授手習鑑＝**車場**。松王（呂太夫）梅王（源路太夫）櫻丸（富太夫、むら太夫）杉王（隅榮太夫、さの太夫）時平（和泉太夫）絃（叶）人形＝梅王（玉幸）櫻丸（紋十郎）杉王（紋司）松王（榮三）時平（玉市）**茶筌酒**。（駒太夫、清二郎）人形＝白太夫（小兵吉）八重（文作）十作（多三郎）はる（政龜）千代（文五郎）**喧嘩**。（文字太夫、廣助）人形＝はる（政龜）千代（文五郎）松王（榮三）梅王（玉幸）**櫻丸切腹**。（土佐太夫、吉兵衛）人形＝白太夫（小兵吉）梅王（玉幸）はる（政龜）松王（榮三）千代（文五郎）櫻丸（紋十郎）八重（文作）**天拜山**。（錣太夫、新左工門）人形＝菅相丞（玉藏）白太夫（小兵吉）僧（門造）梅王（玉幸）平馬（榮三郎）**寺入**。（和泉太夫、友造、友平）人形＝戸浪（政龜）菅秀才（紋昇）千代（文五郎）小太郎（文枝）三助（玉德）よだれくり（玉昇）**寺子屋**。（古靱太夫、清六）人形＝源藏（玉藏）戸浪（政龜）菅秀才（紋昇）小太郎（文枝）玄蕃（門造）松王（榮三）御臺（玉七）よだれくり（玉昇）千代（文五郎）

双蝶々曲輪日記＝**橋本**。（津太夫、綱造）人形＝おてる（光之助）おまつ（文之助）甚兵衛（榮三）太助（玉市）與五郎（紋太郎）あづま（文五郎）治良右工門（玉藏）與次兵衛（玉次郎）

新曲三人片輪＝**躄**（相生太夫）盲人（呂太夫）啞（伊達太夫）有德人（長尾太夫）絃（道八、友工門、喜代之助、吉李、廣二、清友、寛市）人形＝有德人（文五郎）盲人（紋十郎）啞（小兵吉）躄（榮三）

三十三所觀音靈驗記＝**澤市內**（伊達太夫、重造）**壺坂寺**（大隅太夫、團六）ツレ、叶太夫、友作、團伊三）（鶴太郎、新太郎、友花）人形＝澤市（玉幸）お里（紋十郎）觀世音（文之助）

謹賀新年

香伯會

梅本香伯

東都義太夫界の十一年度さまゞ

素義の部（亂表）

☆…東都素義審査會の檜舞臺たる、東都五十義會に於ては、その第廿五回を五月廿一二の兩日、芝飛行館に、同じく秋期大會第廿五回を十月廿八、九の兩日、清水ビルホールに開催。

☆…同會々長として永く盡力ありたる鈴木松寶氏は、次期大會を以て會長を辭任。

☆…帝都素義聯合會は第六回を五月四、五、六の三日間、第七回を十月八、九、十の三日間、共に並木倶樂部に開催。

☆…伊藤松鶴氏主催に依つて、六月末東都素義の大聯合軍出演にて、歌舞伎座に華々しく大會を開く。

☆…斯界に永い歴史を持つ聲友會は、第百七回の大會を、六月十九日並木倶樂部に。

☆…大阪素義の貴志凌東氏歡迎義太夫會が一月廿七日に電氣倶樂部で。

☆…三月廿五日並木倶樂部に於て、小林和舟氏の華かなる見臺開きあり。

☆…寶藏寺天昇氏を會長とする大東京素義聯盟審査會解散さる。

☆…亡き義太夫界の恩人、其日庵杉山茂丸先生の追悼會、七月十九日竹本素女師主催にて行はれ、經木流し、川施我鬼などあり。つゞいて同月廿三日丸ノ内常盤に於て松竹社長大谷竹次郎氏主催にて、文樂座々員一同出席のもとに、追悼會あり。

☆…春期大會を休會した兜會は、その秋期大會を十月十一日清水ビルにて華々しく擧行。

☆…十月廿四、五日兩日の報知新聞社主催東西素義審査會、俄然審査點數に大問題を惹起し、一時相當なる破綻をみせしも、やうやく落着。東京方の再勝となる。

☆…兜會々長中澤巴氏滿期に依つて辭任あり、後繼會長として鈴木松寶氏、副會長に近江清華氏就任。兜會益々發展。

☆…近江清華氏主宰にて、可松、靜史氏等の淨聲會生る。

☆…飛石かなめ氏を會長として大東京嬉會誕生。無駄をはぶいての内容本位の催しとして、斯界に一石を投ず。

☆…河野國聲氏に依り淨曲無名會生る。暫く斯界より遠ざかりつゝありし同氏の本年度の活躍は見事なものにて、惑星の再起は華々しきものがあつた。

☆…竹内たもつ、玉井松樂、松岡茂里雄三氏に依つて三人會生る。

☆…十二月五日、小石川倶樂部に兜會幹事招演會開かる。相談役中澤巴氏、會長、副會長の就任祝賀の意味にて極めて盛會。

☆…レコード稽古の合理化を叫んで、豊澤廣助師を師匠とせる松葉會生る。

☆…その他、鳥の會、聲友會、朝見會、義松會、五聲會、綾秀會、芳聲會、日の出會、三福會、良友會、香伯會、巴津天會、兜會花組、語交會、招友會、素曲の會、その他各師匠連の催しは數限りなく、納會も斯界の發展振りを示してそれ〴〵見事な成果を收めた。

☆…太棹社の催しとしては、左記の通りで

いつも非常な盛況をおさめてゐた。
☆…一月廿七日、白木屋に於て淨曲振興會
☆…一月廿九、三十兩日、松屋に於て身振劇入り東都義太夫會。
☆…二月廿五、六兩日同じく。
☆…三月十八日、富取芳河士發病。廿八日入院に就き催しは休會となる。
☆五月四、五兩日、第三回東都素義名流大會を並木倶樂部に開催。
☆…五月廿三、四兩夜、芝青年團會館に於て身振劇入素義會開催。共に富取三久子に依つて纏りしもの。
☆…七月廿六、七兩日、太棹社主病氣全快披露義太夫大會を並木倶樂部に開催。東都素義界の第一流、義を以て多數參加あり。
☆…八月廿五日、三越ホールに淨曲振興會開催。
☆…十月十九、廿兩日第四回名流大會を並木倶樂部に開催。
☆…十月廿六日、折から秋雨の中に、竹本紋太夫淨瑠璃塚回向を太棹社に催す。參ずる者、文壇、義太夫界の大家連。據つて直ちに記念特輯號を發行。近來の好評を博す。

玄人の部（亂表）

☆…淨曲協會主催にて、一月廿三、四兩日仁壽講堂に於て帝都因會並に女子研究會の大會開催。
☆…豐澤團八師、義太夫進興會の名稱のもとに人形町に教授所を設け、新しき教授方法を以て見ゆ。
☆…三月廿四日、並木倶樂部に豐澤團左衛門の追善義太夫會開かる。
☆…三月廿五日、卒然として竹本靜香師逝く。
☆…五月八日、日本橋倶樂部に豐澤會開かる。十月卅日電氣倶樂部に同じく。
☆…帝都因會春季大會を四月廿三日、秋期大會を十月廿一日、共に丸ノ内電氣倶樂部に開催。
☆…五月十七日より十九日迄、帝國ホテルに新義座の東上。同じく十月五、六、七日の三日間も亦同前。新しき刺戟を東都義界に注入。
☆…竹本佳照會、第六回を六月十六日に飛行館に。
☆…素女會第十二回公演は六月廿八日飛行館に。
☆…勝女會第九回を六月廿二日電氣倶樂部に。
☆…竹本都太夫後援會、十月十五日夕東橋亭に開催。小さん、可樂、馬樂等東寶名人會連應援。
☆…帝都因會に女子部設立さる。東都の女義擧つてこれに加入す。
☆…十一月廿八日、その創立記念義太夫大會を明治座に開催。空前の盛況を見る。
☆…豐竹巴太夫師門弟女子部の巴雪主宰にて巴恩師會生る。
☆…九月十六日、多くの待望を擔ひをりし竹本相模太夫逝去。
☆…素義間宮さくら氏、遂に竹本さくら太夫となつて因會へ入會、津賀太夫師預りとなりいよ〳〵玄人となる。
☆…十二月二十日、麻布公會堂に廣助師自作自演の「修善寺物語」を發表。三絃は道之助師。

謹賀新年

竹本津太夫	竹本土佐太夫	豊竹古靱太夫	竹本錣太夫
竹本長尾太夫	豊竹呂太夫	竹本貴鳳太夫	竹本伊達太夫

謹賀新年

豊澤新左工門	鶴澤叶	豊澤仙糸	鶴澤道八
野澤吉兵衛	野澤吉彌	豊澤廣助	鶴澤清六

謹賀新年

竹澤團六	野澤歌助	吉田榮三	吉田文五郎
吉田玉次郎	吉田玉七	桐竹紋十郎	桐竹門造

謹賀新年

大阪文樂 新義座

豐竹つばめ太夫　野澤勝平
豐竹小松太夫　豐澤猿糸
竹本津磨太夫　竹澤團二郎
竹本越名太夫　野澤勝芳
竹本叶美太夫　鶴澤綱延
竹本南部太夫　野澤勝之介

主任　土屋秀雄

事務所　芝區新橋二丁目八番地
たほ屋吉田滿多次方
電話銀座二〇八番

大阪版

―大阪一素通―

八方大會（第五回）十一月自十八日至廿一日白百合にて競演、龜樂、勢玉、公孫樹、吾樂、吾妻、貴雀、鳴戸奥（豊竹龍太夫）紘竹本組之助。（二日目）さわらび、晴山、虎遊、登隅、古英、清鳳、あか尾。（三日目）貴雀、加竹、笑樂、いろは、佐市、貴正、○力。（四日目）老若、長子、薫、靜子、いさ子、吉未。（紘）伊都子、雛吉、八穂子、雛玉、道造、組之助、團彌。

進歩一等（古英）以下略す。審査田中ろ昇、總務八島。顧問豊竹瀧太夫。

婦聲會（第五回）十一月十九日正後十二時より於道頓堀倶樂部開催。審査格は有床女と團六師匠後見と承はる。祝言草履打掛合、岩藤（竹千代）善六（徳子）腰元（龍助）尾上（仙千代）紘團伊三。是より競演に移る。酒屋（小糸、竹千代）宿屋（千代子、團伊三）紙治（鶴榮、團伊三）太十（うさ子、雛昇）合邦（喜綠、仁平）野崎（さくら、廣芳）玉三（米子、仙三郎）鮨屋（吉末、吉内）戀十（加壽美、末定）岸姫（玉子、團伊三）御所（末廣、雛昇）中將姫（徳子、團伊三）長局（春子、八造）日蓮三（龜子、末定）酒屋（ひさご、團伊三）合邦（青松、小勇）柳（東、廣芳）鮨屋（しげ子、末定）揚屋（ふでや、末定）柳（みやぎ、友造）太十（靜子、吉内）宿屋（三ッ惠、勝童）河庄（平梅）御殿（房子、吉右）大切堀川掛合、與次郎（徳子）傳兵衛（玉子）お俊（三ッ惠）お鶴（房子）母親（龍助）紘豊澤團伊三、豊澤竹千代、司會者竹本龍助。

竹本熊玉引退披露會　十一月二十日午前八時より於道頓堀倶樂部開催、御祝儀逆櫓（土佐美太夫、紘勝玉）つぼみ、松壽、兒石、要、五十鈴、方圓、杜昇、古木氏等あり、小老の着座せし折には中將姫（喜登、紘勝玉）段切前なるも美味出彩好評。本下（竹本熊玉、豊澤廣助）奥庭より大落し迄八十近き老女とも思はれぬ巧匠滿場を陶醉させしは感心なり、その愛娘勝玉丈今後大に奮闘し母名を襲ひ名匠たられよ。柳（寛司、勝玉）太十（都春、松風士）明烏（貴勝、勝玉）岡崎（松甫）岸姫（清玉、松風士）合邦（十九、勝玉）菅四（布袋、新玉）菅四奥（みやぎ、友造）逆櫓（小松、卯月）酒屋（千里、廣助）此所熊玉、勝玉を控へ土佐美丈の雄辯なる挨拶あり。更に廣助、熊玉、勝玉、土佐美四匠の紀念撮影あり。中入逆櫓（源司、松風士）太十（草樂、廣助）柳（奥村三玉、廣助）合邦（晴山、勝玉）野崎（春花、勝玉）紙治（都十、小勇）稽古屋（横田榮司、廣助）附言祝語者四十五氏、出演未定者は五十二名。因に廣助師は襁褓の時乳人の熊玉老師との因縁とて當日は頗る斡旋につとむ。

故大音彌的追善淨瑠會　十一月廿三日午前十一時於道頓堀倶樂部開催。式飾附けは極めて高尚優雅にして殊勝なるを覺ゆ、程なく讀經を了り夫れ〳〵の燒香あり休憩。初手向御所三（金石）追手向壺坂（いづみ）紘勇七。登志若、あい子、柳子、とよ子、しげ子、たれ子、糸子、喜笑、里喬、幸玉、新昇、賀若、すゞめ、和甫、傳勝、番茶、粹香、金廣、茂勢齊、松壽、十勝、金司、横田榮司、古金司、東六。（紘）小勇、清芳、仙若、友太郎、ます子、錦龍、廣重。太十掛合

重次郎（大仁）初菊（正京）操（久蝶）久吉（よしの）さつき（十司）光秀（太若）糸錦龍。鮨屋掛合、權太（よしの）お里（ゑびす）維盛（青果）梶原（渓水）内侍若君（叶）母親（喜登）彌左衛門（の笑）絃竹本東廣。野崎村掛合、お光（美よし）お染（都華）母親（清月）お芳（喜登）久松（久蝶）久作（龜壽）絃竹本廣春。本下掛合若狭之助（公木）三千歳（南）下部（金司）蕃左衛門（東升）本藏（瓢樂）絃豊澤廣太郎。

故豊澤新女追善會　二十四日蘆原倶樂部開催、祭壇は遺憾なく飾り盡せり讀經を濟し初手向百度平（一港）追手向忠六掛合。三司、司、一港、小富士、以下源司、鐵昇、新昇、北星、貫昇、仙骨、さくら、芳調、清月、青葉、錦城、美昇、勝子、登隅、小富士、布袋、松葉、〇ス、政尾。（絃）廣芳、八重子、雛吉、新玉、とめ子、勝重、彌生、小勇。

淨瑠璃練習會　（土佐會）第十九回十一月廿三、廿四兩日午前十時より於文樂座開催、（出番順くじ引）廿三日、（宿屋）土佐夫太夫、（組打）土佐榮太夫、（野崎）土佐子太夫（太十）さの太夫、鮨屋（藤花、隅瀧）堀川（華峰、雛吉）伊賀五（古林、仙平）壺坂（松蔦、市之助）御殿（川妻、隅瀧）伊賀五（登玉女、團彌）忠六（白鳳、市之助）本下（壽玉、八造）中將姫（老壽、八造）長局前（いづゝ女、雛昇）長局奥（晴海、仙平）御殿（政尾、末定）阿古屋琴責（愛すけ、團六）合邦（あづま、雛昇）岡崎（米笑、新三郎）鳴戸（竹子、雛昇）紙治（小松浦、市之助）吃又（貴木、勇喜榮）蝶八（むさし、祖太八）酒屋（靜甫、吉左）廿四日（鈴ヶ森）土佐夫太夫（杉酒屋）土佐榮太夫（梅由）土佐子太夫（安達三）さの太夫。合邦（奥村三玉）忠六（保聲、喜代之助）菅四（久蝶、廣春）伊賀五（鶴峰、友造）百度平（ゑん糸、喜代之助）忠九（梅光、友平）鰻谷（春子、八造）沼津（芳玉、吉右）玉三（米子、仙三郎）太十（昭二、仙三郎）大安寺（千歳、友平）戀十（吉房、喜代之助）忠四（井筒、仙三郎）陣屋（眞若、稻丸）柳（貴角、吉季）本下（萬花、喜代之助）堀川（美よし、廣春）引窓（清水、友平）二十四孝三（信の）蹙十一（田邊い京、新造）講評土佐太夫。出演者四十名。

花美糸會　（第五回）十一月二十七日於道頓堀倶樂部午後正四時開演例により（出順くじ引）宿屋（組春、竹千代）組打（龍助、緋佐子）佐太村（竹千代、仙千代）長局（仙千代、源花）壺坂（源花、組春）中將姫（緋佐子、竹千代）紙治（照靱、緋佐子）大喜利安達三掛合、役割籤引、袖萩（仙千代）義家（竹千代）宗任（組春）濱夕（龍助）お君（豆千代）貞任（緋佐子）謙杖（照靱）絃（源花）

竹本組之助連　十七日（中央）御殿（京駒）忠四（一昇）阿漕（キリン）志渡寺（南角）太十（虎十）油屋（吾妻）壺坂（仙龍）絃團初。

豊澤竹千代連　二十二日（日乃出）新口（鯛司）蹙瀧（三玉）儀作（登廣）御殿（林やなぎ）志渡寺（三勝）野崎（かすみ）酒屋（丸〇）。

竹本廣芳連　二十二日（大東）梅由（錦城）宿屋（さくら）玉三（信子）帶屋（緣り）

竹本清勝會　二十四日（大東）明烏（柳華）岸姫（宇樂）太十（一木）忠三（大西キリン）安達（丸〇）合邦（やまと）中將姫（松玉）

吾妻連　廿五日（大東）太十（ひ

よこ）御所（東關）忠六（亀鶴）鮨屋（一鳳）鰻谷（里卜）

豊澤仙二郎連　廿五日（白百合）宿屋（千昇）帶屋（榮四）橋本（松鳳）梅忠淡路町内（孝調）堀川（花昇）ツレ豊澤猿若。

野澤吉彌連　廿七日（白百合）港町（春子）廿四孝三（信濃）長局（金光）楠三（眞若）

竹澤團六納會　廿六、七、八、三日間（白百合）乙鳥、蘭瓶、喜友、泉、有床、愛輔、山照、平梅、部雀、雷子、からく、南司、山成、吳山、琴城、銀司、春光、喜童、巴洋、藝豊。

宇壽女會　十二月一日道頓堀倶樂部にて第卅四回開催。掛合（佐太村）白太夫（中琴）梅王（吉房）八重（いづゝ）櫻丸（登玉）柳（雛代）御殿（政尾）御殿（つぎ子）岸姫（三ッ惠）戀十（竹子）揚屋（宮城）市若（乃菊）鰻谷（春子）菅四（末廣）質店（いづゝ）帶屋（吉房）鳴戸（中琴）岸姫（愛輔）岡崎（園子）伊賀五（登玉）切中將姫掛合、姫（吉房）浮舟（登玉）桐の家（いづゝ）廣纖（つぎ子）岩根（愛輔）下部（雛代）豊成（春子）各紘團六、勝童、友造、團彌、綱龍、雛昇、稻丸。

野澤吉右連　一日（中央）赤垣（妹脊）合邦（喜友）蝶八（東光）彌作（角大）百度平（可淺）忠九（勇樂）菅四（錦昇）忠六（喜源）酒屋（一木）陣屋（芳玉）沼津（喜鶴）

豊澤竹千代納會　（三日）道頓堀倶樂部。忠六（かすみ）新口（進若）合邦（登月）玉三（三玉老）鮨屋（丸〇）沼津（北和鳳）忠三（大西キリン）御殿（林やなぎ）忠九（萬兩）大切一力茶屋掛合、由良之助（松光）重太郎（キリン）喜太八（かすみ）おかる（二葉）彌五郎（やなぎ）力彌（進若）平右衛門（昇）

豊澤新造納會　（四日）道頓堀倶樂部亂表伊賀五（田邊い京）鰻谷（生樂）中將姫（貴雀）引窓（文彌）日吉三（華玉）紙治（歌鳳）油屋（千鳥）野崎（華峰）阿漕（うろこ）日蓮三（一昇）

團友會　六日（大東）御所（喜久）玉三（紫幸）彦九（多て津）鎌腹（登一）帶屋（義鳥）中將姫鹽崎（其勝）紙治（貴道）合邦（奥田利生）

温泉近松會　乙女文樂人形淨瑠璃。表題の下に十二月七日より至十二日（六日間）新世界ラヂウム温泉階上に開演、（初日）鳴戸（千昇）彌次喜多並木（林やなぎ）菅四（虎勢）御殿（可昇）質店（榮四）長局（松井松鳳）城木屋（孝調）紘仙二郎（二日目）日吉三（東玉）赤垣（笑德）宿屋（旭暉）合邦（梅曲）沼津（松尾）酒屋（南糸）堀川（吾孫子櫓）以上龍二郎。（三日目）本下（清月）新口（千鶴）鮨屋（紫幸、小住）忠九（ろ昇、八穗子）佐太村（春好）鎌腹（登一）紘小住、戀十（和鳳）紘龍二郎、（四日目）菅四（老若）忠六（つばめ）揚屋（義鳥）鰻谷（生樂）太十（可淺）油屋（千鳥）壁十一（うろこ）（五日目）合邦（晴山）壺坂（あか尾）明烏（貴道）布四（和十）鮨屋（昇）合邦（貴正）太十（西村紫紅）（六日目）鳴戸（廣玉）御殿（璃鶴）安達三（四二九）大文字屋（重司青年）嫁おどし（九寶）太十（吾妻）陣屋（信濃）千秋樂、因に此會の成立者は櫓氏の發動にやなぎ氏文樂誌主幹の文哉氏ら携はり師走時產聲した、出演負擔額も到つて平易に算出して大方の愛義を迎へる趣旨で來る正月には我れも〳〵と申込まるゝで連續は永當〳〵。特に開演中はふんど、五福、松玉氏ら日參傾聽に濺ぎ、研究されるそうである。尙ほ從來の温泉會は右の日を除き何時でも出演隨意とあるから稽古には何れも小文樂其儘の觀、而して「半段、一段語りは自由開放」と云ふ樂々さ、浪花名物の名を存する者さこそ〳〵。

各師各會 新春初會

通信ありたるもの、外は自一日至十三日都新聞より

◆豊澤仙彌（五日）文化
◆竹本小和光（同）入谷
◆鶴澤鶴玉（六日）文化
◆竹本春昇（七日）文化
◆竹本清照（同）入谷
◆鶴澤綱之助（八日）伊勢丹
◆三人會（同）入谷
◆竹本鶴松（同）文化
◆竹本紀代松（同）菊川
◆竹本都太夫（九日）入谷
◆竹本和光（同）錦橋閣
◆竹本染之助（同）菊川
◆豊澤團市（十日）花むら
◆豊竹巴丈（同）淀橋
◆鶴澤勝助（同）交正
◆竹本久之助（十日）淀橋
◆竹本播菊（同）文化
◆豊澤新兆（同）入谷
◆豊澤猿女（十二日）菊川
◆竹本祐松（同）多加良
◆豊澤新花（同）文化
◆豊澤新次郎（十三日）小石川
◆鶴澤才廣（同）入谷
◆竹本綾秀（同）交正
◆三福會（同）文化
◆朝見會（十四日）花むら
◆大東京嬉會（十三日）交正
◆同（十四日）菊川

謹賀新年

芋弘堂

一坂菊・郷本

當座帳

◇鈴木和勇氏　澁谷區富ケ谷一五一五番地へ移轉。
◇佐久間三司氏　三福會の佐久間三司氏は福司と改名。
◇笹本竹始氏　西巣鴨四丁目二四四番地へ轉居。
◇清水彌生氏　駿河臺千住名倉病院分院へ入院中。
◇高橋可遊氏　病氣日に增し快方。
◇間宮さくら氏　竹本さくら太夫を名乘り因會へ入會。
◇渡會うつぼ氏　電話本所三八〇〇番に變更。
◇北脇花昇氏　深川區門前仲町二丁目三番地へ轉居。
◇大東京嬉會　深川區門前仲町二丁目三番地北脇氏方へ事務所移轉。
◇金子旭六氏　目黑區下目黑四丁目九八五番地大石方へ移轉。
◆鶴澤寛三郎　神田區神保町三丁目廿七番地へ轉居。
◆豊澤廣助　京橋區木挽町四ノ三佐倉家旅館に出張稽古中。
◆竹本素昇　京橋區木挽町三丁目十三番地へ轉居。
◆竹本東朝　赤坂區仲ノ町十八番地へ轉居。
◆豊竹麗太夫　牛込區揚場町九番地へ轉居。
◆豊澤猿三郎　因會理事兼會計に就任。
◆豊竹巴太夫　因會理事に就任。
◆菊屋三絃店　電話神田二九七五番（呼）に變更。
◆竹本素女　門下素廣、素八、素次、素工門、素國等に豊竹巴住は一日より東寶名人會へ出演。

POST 各地通信

福島

鈴木錦祥

時下寒冷の候貴社益々御隆盛奉賀候陳者十二月八、九、十日若葉會主催にて聚樂館に於て左記の番組のもとに大競演會を開催仕候間通信申上候。

初日＝梅由（きぬ子）先代（花舟）松王（才司）寺子屋（六甫）合邦前（夏井）本下（錦清）沼津（龍清）堀川（瓢）合邦奥（錦祥）

二日目＝先代（きぬ子）中將姫（才司）安達（六甫）太十（夏井）河庄（瓢）鳴門（龍清）玉三（錦祥）紘（鶴澤六太郎、同友千代）

京城

愛好生

京城に義太夫の師匠をする事三十年、七十五歳の鶴齡を迎へた竹本奈良梅老師の祝賀大會を陽春に華々しく開催する話が、京城商工會議所會頭賀田直治氏、京城素義協會前會長後藤楓江氏を始め各方面の有志に依て計劃されてゐます。

梅聲會は二日、玉友會は二日、淸鳳會は五六日頃それ〳〵新年彈初會を催す事になつてゐますが、次號に詳細を報道する事に致します、歳末多忙右一筆通信。

編輯後記

▼昭和十二年の春を迎ひ、先以て皆樣の御健勝を祝福申上ます。

▼昨年の東都義太夫界は別揭の通り非常な發展を示しましたが、本年はより以上振興させたいものであります。

▼なほ昨年は同業機關誌が東京から岩場氏の『義太夫新聞』大阪からは吉田氏の『文樂』が生れましたが、こうした機關誌の生れる事はこれも吾が淨界の發展を示したものと存じます。

▼年賀の御芳名揭載方を皆樣より御快諾賜りまして、いつも乍ら新年號の賑かに弊誌の花と誇り得ることを厚く御禮申上ます。

▼年賀御芳名の揭載は凡て順位不同である事を御承知願上ます。

▼高橋可遊氏、胃に二ヶ所の疵を發見、南博士より當分義太夫を禁じられ昨秋より靜養中でありますが、日に增し良好、目方は大分減ったさうですが、減つた方が却て普通の目方だそうで、義太夫解禁の日一日も早からん事を切にお祈り致します。

▼淸水彌生氏も昨冬自動車を避けて折骨、駿河臺の名倉病院分院へ永々入院、歩けるまでにはまだ〳〵日數を要すさうですが、五十義會東大關二巨頭の奇しき入院は淋しい限りであります。

▼金王丸氏風邪の爲め『ラヂオ淨曲漫評』は休載致しました。

▼本號を發行致しますと、又々越後へ出張致します。今度は雪の越後で、行きも歸りも道中汽車の立往生が思ひやられます。

——芳河士——

訃報

宮崎阿松氏　舊臘廿八日永眠。

田邊い京氏　舊臘廿九日急性肺炎にて永眠。

松野一〇氏　永々病床にありし氏は一月四日遂に永眠。

雪野いさみ氏　舊臘廿七日永眠。

謹んで哀悼の意を表す。

太棹社

本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

高島一廣氏　鈴木一朝氏　廣瀬いろは氏　岡崎円六氏　吉川浪補氏　平野ろ昇氏　綿貫六助氏　和田春和氏　阿部一氏　平田和氏　中澤巴氏　竹内をる氏　安藤どくろ氏　吉田登盛氏　小川都山氏　安藤都昇氏　保々長平氏

栗原千鶴氏　神馬里芳氏　本木大熊氏　鈴木和樂氏　小林和舟氏　本多可笑氏　大和田可笑氏　飛石かめ氏　加藤兜氏　高橋可遊氏　西田可松氏　勝川勝川氏　紺我笑氏　竹内たもつ氏　松尾武市氏　大用大嘉津氏　田口辰壽氏　疋田大龍氏　井上巽氏

金井辰稻氏　乃村素弘氏　坂倉素遊氏　浮谷祖樂氏　片山つばめ氏　宮本武藏氏　萩原うつぼ氏　乃村乃菊氏　高野昇氏　中野吳羽氏　石川華笑氏　國井やまと氏　清水彌生氏　瀧脇まつば氏　松林福笑氏　鈴木兒雀氏　是澤悟園氏　水戸部壽巴氏　原田越聲氏　河野國松氏　松岡語樂氏　杉山語

寶藏寺天昇氏　島田天賞氏　大築葵氏　松本朝章氏　及川有明旭氏　柳岡三幸氏　寺岡樂氏　波多野三樂氏　木村さかえ氏　平井榮氏　間宮さくら氏　中島山鳥氏　細川清氏　金田鳳氏　井田金菊氏　錦泉氏　淺田奇聲松氏　歸山歸世花氏　川奈部銀司氏　猪谷銀水氏　岩木義雀氏　岩田末成氏　高瀨操氏

吉田美地句氏　横井三由氏　野口みなと氏　岡田源氏　鈴木松實氏　北村三葵氏　玉井松樂氏　菊地秋月氏　平井壽樂氏　山田壽甄氏　秀峯氏　伊藤松猿氏　田口司重氏　濱口秋華氏　武笠宏亮氏　高品一重氏　桑原美峰氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清華氏　湯原清司氏　日野靜波氏　沼井盛鶴氏

（地方之部）

米國　平野一昇氏
同　武榮玉氏
同　杉山陶岳氏
同　武田德昇氏
同　兼廣廣玉氏
同　西本西紫氏

樺太　宮下杉鳳氏
横濱　霜島錦司氏
同　田島集樂氏

第八拾貳號　（毎月一回發行）

▼記念寫眞掲載料は一頁金拾五圓申受ます
▼誌代は總て前金御拂込の事
▼なる可く振替に御送金の事
▼郵券代用は一割増但二錢切手の事

昭和十二年一月十三日印刷納本
昭和十二年一月十五日發行

東京市小石川區音羽二丁目一四
編輯兼發行人　富取壽鹿

東京市牛込區早稲田町五八
印刷人　栗原榮松

東京市牛込區早稲田町五八
印刷所　栗原印刷所

東京市小石川區音羽二丁目一四
發行所　太棹社

振替東京三一七八五番

定價
一部　金三十錢　郵稅二錢
六月分　金一圓八十錢　郵稅共
一年分　金三圓　郵稅共

廣告料
普通　一頁　金貳拾圓
特別　一頁　金參拾圓

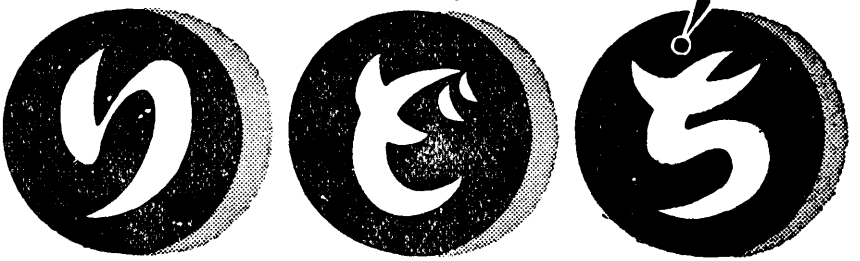
謹賀新年

新時代の要求！

使用簡便な豫防藥

ゴム製品、藥劑等の缺點を除いた無脂肪沸騰性の錠劑で挿入直に溶解し安全な膣壁と殺菌の重復作用を起しよく花柳病豫防の目的を果します。感覺自然的でありますからゴム製品の比ではありません。粘着なく使用後爽快の理想的豫防藥であります。本劑の使用によつて洗滌の必要なく毒物性の危險藥臭等なく連續御使用するも副作用弊害更にありません。

沸騰性錠劑



藥價
二十錠入 壹円
五十錠入 貳円
百五十錠入 五円
三百五十錠入 拾円

前金御注文送料本社負擔

東京市京橋區銀座二ノ三
新潮製藥株式會社
電話京橋二六四五番
振替東京七〇一〇八番

關西料理

すつぽん椀なら江戸前蒲燒なら
御宴會は大勉強すべて安値に

円六

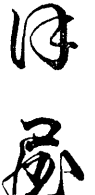
九段下俎橋
電話九段四〇〇六番

女中は皆藝人揃ひ・太棹の彈き手も揃へて皆樣をお待ち致して居ります。

——円六獨特のサービス——

風流・金ぷら・茶漬

【美地句】



新橋二ノ八
電銀二〇八

謹賀新年

著者裝幀

新刊

岡田俳句子規時代集

頒價金壹圓五拾錢
送料金拾錢
第一版品　切
第二版品　薄

本書は著者が曩きに昭和六年四月十日先考三十三回忌に俳句子規時代集を上梓供養したと同樣、本年五月十一日先妣五十回忌に際し紀念出版するもの、卷頭著者の言葉に「……第一句集は正岡子規先生在世中私淑してゐた私の姿であり、第二句集は子規先生終焉後明治俳句の混沌として依據すべき處なき――一種の俳界戰亂――時代を冷觀して私は私の進むべき道を拓かんとする簑笠犂鋤の面影であると言つてよい……」とあり、添ふるに大正三年日本最初の俳畫展覽會へ出品したる著者の處女作を口繪とする等、近時豪華を誇る此種出版物が所謂大家の序跋讃頌題詩句を賣物とせる中に、巍然として詐らざる自己を表現せる處著者の面目耀々たるものがある。

發行所　西宮市川添町十一番地　關西藝術新聞社　振替口座大阪七〇二九六番

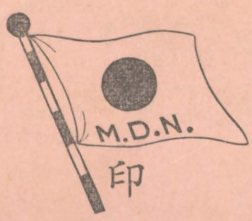
發賣所　東京市丸ノ内三菱二十一號館　俳書堂　振替口座東京二七一〇九番　電話丸ノ内(23)四八〇〇番

謹賀新年

醫療用
齒療用
治療界の寵兒!!

於各大博覽會
賜優良國產金盃賞牌多數

東洋に於ける斯界のパイロット!!



本木注射針

俳號 本木大熊

製品種目

醫療用
- 超不酸化鋼製
- 不酸化鋼製
- 引拔鋼化鐵製
- 英國最優鋼製

齒療用
- 白金製
- 十八金製
- ニッケル製

東京市瀧野川區中里四四七
本木汁射針製作所
所主 本木梅治郎
電話水(85)一二四三七番
電話水(85)一五二〇九番
出張所 東京市本郷春木町二ノ五
電話水(85)三四一〇番
研究所 千葉縣君津郡富岡村田川

昭和十二年一月十三日印刷納本
昭和十二年一月十五日發行（毎月一回發行）
太棹（第八拾貳號）
（定價 金參拾錢）

謹賀新年

歌舞伎座・新橋演舞場

御觀劇の節は＝辨松食堂へ

歌舞伎座前 辨松總本店

京橋區木挽町五丁目一番地
電話 三〇六番 四〇六番
銀座 五〇六番 六〇六番